

横山ゆずり作 「クラブ活動」

効果音 (野球部の練習風景)

ナレーション ここはある高校。授業が終わって、校庭では幾つかのクラブが練習に熱を入れています。

全員 (口々に)「そら、走れ走れ!」「しっかり取れよ!」etc.

高橋 1年坊主も張り切ってるな。この文だと、年度の県大会はいい線行きそうだけ。

伊藤 まあな。去年は予選で負けたもんな。おれたち2年、特に部長のお前は責任重大だな。

高橋 ああ。OBも練習見に来るしな。

コーチ (オフ)おーい、お前ら何やってんだ。しゃべってる暇あったらマラソン 10 周だ!

高橋 ほら来た。鬼コーチの“百本ノック”のカミナリが落ちる前に走ってくるか。

伊藤 おー!

ナレーション ここ野球部も、近づいた県大会を目指して猛練習の真っ最中。キャプテンの高橋君を始めとして、去年惜しくも敗れた悔しさを晴らそうと、部員一同大張り切りです。

渡谷 みんなお疲れ様。タオルと差し入れがあるわよ。

高橋 おっ、ありがたいな。

伊藤 今日は特別、マネージャーが天使に見えるよ。

全員 (笑い)

渡谷 おだてには乗らないわよ。あ、そうそう。キャプテン、OBから連絡があつてね。来週、練習見に来るって。

高橋 来週か…。OBがやっぱり来るのか。で、だれが来るって?

渡谷 ええ、今村先輩や、武内先輩や…。3、4 人ですって。

伊藤 OBが来るとキツいんだよなあ、練習が。全くあれじゃシゴキだもんな。マイるぜ。

ナレーション それから 1 週間ほどたったある日。授業が終わって高橋君が部室に入ってみると――。

効果音 (「ガラッ」と戸の開く音)

高橋 あ、今村先輩、来てたんですか。

今村 よう高橋、みんなの調子はどうだ?

高橋 はあ、まあなんとか…。

今村 「なんとか」ってお前、キャプテンだろう。しっかりしろよ。今日はとくと見せてもらうからな。

高橋 はい。

ナレーション いつもながらキビしいOBの練習もやっと終わったころ――。

今村 高橋、この超shなら年度の大会イケそうだな。今日はおれたちに付き合えよ。おごるぜ。

音楽 (スナックのBGM)

今村 あ、おれ、いつもの水割りね。それとこいつに何か軽いの作ってやって。

高橋 先輩、タバコ吸うんですか?

今村 まあな。お前もやれよ。ほら、遠慮すんなよ。おれが部長のころは、野球部室なんて吸い殻の山だったぜ。硬派ぞろいでよ。少しは恐れられてたんだぜ。大体先公が怖くてタバコも酒も飲めねえで野球が強くなれっかよ、野球が。

高橋 今、風紀委員がうるさいんすよね。それにうちのクラブはマネージャーがねえ。

今村 マネージャーって、あの利香とかいう子だろ?

高橋 ええ。あいつ、しっかりしてるというか、やかましいというか。なんでもクリスチャンで、教会に行ってるとかで、クソまじめで気が強いから、きっと部室でタバコなんて吸ったら、それこそカミナリ落ちますよ。

今村 そんなにうるせえのならおん出して、代わりにもっとかわいいのを連れてくればいいさ。

高橋 そうしましょうか。(二人、笑う)

ナレーション 調子に乗った高橋君は、初めてのお酒とタバコに味をしめ、また好奇心も手伝って、それを続けていました。そしてそれが、一人前のふりをして大人のマネをしているだけなのだという事に、彼自身気がつかないでいるのです。

渡谷 キャプテン、最近顔色悪いわよ。試合が近いっていうのに大丈夫なの？

高橋 平気さ。ちょっと疲れてるだけだよ。試合までにはなんとかなるさ。

渡谷 そう？ でも風邪もひいたことないのに。まさか高橋君が勉強のしすぎのはずないし。一度お医者さんへ行って診てもらったら？ 試合に差し支えたら…。

高橋 (さえぎって)しつこいね。「大丈夫だ」って言ったろ？ “小さな親切 大きなお世話”。結局心配なのはおれの体より試合のほうだろ。マネージャーは黙って洗濯と差し入れしてればいいの。

渡谷 まあ。“大きなお世話”で悪かったわね。でも試合の直前になって慌てても遅いのよ。

効果音 (「ガラッ」と戸の開く音)

高橋 あ、今村先輩。

渡谷 先輩、いたんですか。

今村 「いたんですか」はひどいなあ。やれやれ、さっきから聞かせてもらったけど、高橋の言っていたとおりだな。マネージャー、あまり口うるさいと、今にこじゅうと小姑みたいになっちゃうよ。

渡谷 先輩までひどいわ。大体このクラブは部長からして…(と言いかけて)あ、今村先輩、この部室、禁煙なんです。タバコはやめてください。

今村 なんだよ。おれはOBだぜ。ここは、昔はおれたちの部室だったんだ。タバコくらい吸わせろよ。おれは現役のころからやってたぜ。それが今は、現役で吸うのは高橋ぐらいしかいなくて情けないよな。

渡谷 (驚いて)え、高橋君が?! 本当なの？ それじゃ最近調子が悪いのも、そのせいなの？ そうなの？

高橋 そんなこと、いいだろ。さあ練習、練習っと。先輩、行きましょう。

渡谷 高橋君…。(モノローグ)わたしにできることは、彼が自分のしていることに気づくように、神様に祈ることだけだわ。

ナレーション しかし、当の高橋君と言えば――。

高橋(モノローグ) マネージャーがおれのこと心配してくれてるのは分かてるんだよ。でも部長として、みんなを引っ張っていくのには、いろいろと悩みがあるんだ。ミスると「キャプテンのくせに」って言われるしな。タバコや酒で気を紛らわしでもしなきゃ、身が持たないよ。それに…、今村さんはOBだし、男同士の付き合いだもんな。仕方ないさ。

ナレーション けれども、そんな部長のわがままが通用するはずがありません。とうとう、ある日――。

効果音 (戸の開く音)

渡谷 あら、高橋君、一人？ みんなはまだなのね？

高橋 ……。

渡谷 どうしたの？ 何を慌てて隠したの？——高橋君、まさかまたタバコを？ そうなのね？ 一体どういうつもりなの？ 部長のあなたがそんなでだれがついてくると思うの？ 1年生やほかの部員にだって示しがないじゃないの。こんな状態で試合なんかできないわ。あなたが「どうしても考えを変えない」って言うんだったら、わたし、大会出場の申し込みを取り消してくるわ！

高橋 ふざけるなよ。大体、教会へ行ってキリスト教の話を聞いてくるのは勝手だが、説教は沢山だよ。おれは、クリスチャンてのは物静かでおとなしくて、3組の白鳥直美みたいな人ばかりと思ってたら、おっそろしいクリスチャンもいたもんだな。それに、たかがマネージャーの分際で…。

効果音 (「バシッ」と平手打ち)

高橋 イッテー。何すんだよ。

渡谷 見損なつたわ。部長は卑怯^{ひきよう}よ。そんなものに頼るなんて。苦しいのは部長だけじゃないじゃない！

効果音 (「バタン」とドアが閉まる音。彼女が走り去る足音。)

高橋 チッキショー。あいつ、思いっきりひっぱたきやがった。

伊藤 (オフから)おーい、高橋。今、マネージャーがすごい顔して走ってったけど、何かあったのか？

高橋 いや、別に。

伊藤 そうか。ならいいが。おい、この部屋、タバコ臭くないか？ お前、吸ってたのかよ。

高橋 まあね。気晴らしさ。

伊藤 いや、しかし、やめた方がいいぞ。おれも前はハク付けにやってたけど、息切れはするし、走れなくなるぜ。それに、マネージャーに見つかったら、コトだぜ。あいつ、今、試合前だからって、おれたち一人一人の健康状態チェックしてるだろ。部員のおれたちよりも張り切ってるんじゃないか？

高橋 全く、大した女だぜ、あいつは。

伊藤 だけど、いいとこあんだよ、あれで。この間、ちょっと用事があって学校に早く来たら、そう、7時ごろだったかな。おれが部室の前を通ると、部屋の中で、お前や、おれや、部員一人一人の名前を挙げて、一生懸命で神様とかに祈ってたよ。おれ、なんだかジーンときたぜ。

高橋 伊藤、すまんが先に行ってくれ。ちょっと用を思い出した。

高橋 (オフから走ってくる)おーい、マネージャー！ あの、渡谷さん。あの、さっきは、…悪かった。おれ、自分でもいけないと思いつつもやめられなかった。甘ったれてたんだよな。結局、タバコなんて、おれにとっては部長という責任の重さからの逃げ道と、好奇心の対象でしかなかったんだ。あの…、まだ怒ってる？…だろうね。

渡谷 ううん。わたしもカッとなって手を上げたりしてごめんなさい。さっきはなんだか私が信じてる神様が侮辱されたような気がして、つい…。

高橋 ごめん。

渡谷 でもわたし、きっとあなたが自分で気づいてくれるだろうと思ってたのよ。だって、高橋君は笑うかもしれないけど、わたし、イエス様は願いを叶えてくれると信じていたんですもの。

高橋 だとしたら、君のそのイエス様ってのは、すごい神様だな。僕に気づかせてくれたんだから。

渡谷 わたしだけの神様じゃないわ。わたしたち皆の、そしてあなたの神様でもあるのよ。わたし

みたいに少し威勢のいいクリスチャンもいるけど、こんな欠点だらけのわたしをも愛して、救ってくださったんですもの。

高橋

そうか。…とにかく、おれ、県大会でベストを尽くすよ。それが終わったら、君の大事な神様、その、イエス様ってのを教えてくれないか？

<完>